

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：32715

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13476

研究課題名(和文)大学生のキャリア発達プロセス可視化による自己形成の基礎研究と国際間比較

研究課題名(英文)A study on self formation of university students by visualizing the process of their career development and the international comparison

研究代表者

番田 清美 (Banda, Kiyomi)

産業能率大学・経営学部・准教授

研究者番号：40646246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学生のキャリア発達に焦点化した自己形成構造が、大学ランクにより差異があることを明らかにした。中堅大学の学生を軸に、難関大学の学生及びインドネシアの大学生と比較検討した。

成果として第1に、中堅大学の学生が就職活動を終了するまでのキャリア発達過程を明らかにした。第2に、省察的自己覚知を刺激するとキャリア発達が促進されるのではないかと仮説を立て、開発したワークショップを用い、中堅大学の学生対象に実験的検証を行った。学生のキャリア発達と認知方略の関連が示された。第3に、中堅大学の学生、難関大学の学生、インドネシアの大学生のキャリア発達モデルを比較した。自己形成構造の差異が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中堅大学の大学生のキャリア発達の特徴を明らかにしたことによって、大学のキャリア教育への視点を提供したことに社会的意義は大きい。中堅大学の学生は、相互理解性は高いが、個性(独立性)の感覚が、選抜制の高い大学生と異なり稀薄な傾向がある。日本の就社会では、組織力の面では、相互理解性の高さは適応的であるととらえることができるかもしれない。しかし、アフターコロナにおいて、社会で求められる就業がジョブ型に移行された場合、中堅大学のキャリア教育においては、個性・独立性の醸成に力を入れる必要があるだろう。今後、認知心理学のアプローチによるキャリア発達研究の必要性が明示されたことも、学術的に意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study examined the differences of the self formation structure from the perspective of career development among the students with dissimilar academic achievements. Focused on the students attending middle-ranked universities, the students attending a highly selective university and Indonesian universities were compared.

The following outputs were obtained. Firstly, the process of career development of the students attending middle-ranked universities was found. Secondly, we developed a workshop which stimulated the participants' reflective self-awareness. Using the workshop, we conducted experimental research to estimate whether the stimulation on the reflective self-awareness might promote career development. Some relations between the career development and reflective strategies were shown. Thirdly, the differences of career development models among the students of middle-ranked universities, a highly selective university, and Indonesian universities were suggested.

研究分野：社会心理学

キーワード：キャリア発達 中堅大学 アイデンティティ 個性 省察的自己覚知 複線径路等至性モデリング
インドネシア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ジェネラリストを求める日本企業の大学新卒雇用では、大学で学んでいる専門性と職業との関連が希薄であり、それゆえに大学生にとってはキャリア選択に困難さが伴う。理系学生は、専門性が生かされる就職先にたどり着く可能性はあるが、文系の学生は大学で学んだ専門性がそのまま企業での配属先に生かされるとは限らない。

日本の大学生のキャリア選択やキャリア発達の研究は、大学生を一括りに扱ってきた。しかし高等教育への進学率が81.5% (文部科学省, 2018) となり、18歳人口に対して大学数が供給過剰となっている現状に伴い、入学時に求められる偏差値は大学によりかなりの多様性がある。選抜性の高い大学から、入学後にリメディアル教育が必要な大学まで幅が広い。本研究では、一般的に就職に有利とされている国公立大学や難関私立大学の学生ではなく、日本の潜在的労働力のボリュームゾーンである中堅の私立大学の学生に焦点を当てる。一部のエリート層ではなく、日本の労働力の中心となりえる層としての中堅大学の大学生に焦点を当て、キャリア発達のメカニズムを解明することは急務であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中堅大学に通う日本人大学生のキャリア発達のプロセスについて検討することであった。大学全入となった現代、大学生と一言に括ることができないほど大学生間の学力に多様性があるものの、大学入学時に求められる偏差値の異なる大学群の違いを明確にした大学生のキャリア発達研究はまだなされていない。本研究では入学時の偏差値45-55を目安とした中堅大学の学生に焦点を当て、キャリア発達の様相を明らかにすることを目的とした。

また中堅大学の学生のキャリア発達の特徴をより明確にとらえるために、選抜性の高い大学の学生との比較調査を実施した。加えて、今後日本の労働力の減少を補うために、新卒市場にも海外のグローバル人材が参入すると考えられる。中堅大学の学生との潜在的な協働者として、将来的に多量な流入が予測されるインドネシアの大学生に同様の調査を行った。

3. 研究の方法

(1) 研究1

キャリア発達の測定にあたり、青年後期及び成人初期の職業選択時の課題とされる「アイデンティティ(同一性)の形成」(Erikson, 1959, 1968)を指標として調査を行った。マシヤ(1966, 1980)はエリクソンの論を発展させ、「危機」「関与」の2変数で同一性の地位の判定を試みたが、その判定方法は半構造化面接によるものであった。そこで、加藤(1983)は日本の大学生を対象にマシヤの理論に基づき、質問紙を開発した。本研究では「同一性地位判定尺度」(加藤, 1983)を使用し、2016年に東京の7つの中堅大学の学生475名に質問紙調査を実施した。

次に、アイデンティティ形成は発達のプロセスである(Kroger, Matinussen, & Marcia, 2010)ことから、縦断研究を行った。上記の調査対象者から、異なる同一性地位に判定された2016年当時大学2年生8名を抽出した。2017年、2018年の3年間にわたって、調査対象者が就職活動を終了する4年次後期まで、彼らの発達変容過程を質問紙調査とインタビュー調査で分析した。半構造化面接によるインタビュー調査では、調査対象者の自己分析ツールとして「キャリア&アイデンティ・ワークシート」(番田, 2015)を用い、ナラティブデータを収集したのち、質的データ分析手法として複線径路等至性モデリング(TEM)(サトウ, 2009; 安田・サトウ, 2012, 2017)を使用した。4年次後期時点で「就職活動 活性・満足群」と「就職活動 不活性・不満足群」の2群に分け、それぞれの群に所属する調査対象者が共通に体験する事項や意思決定方略を調査した。

(2) 研究2

キャリア発達の測定にあたり、「アイデンティティの形成」に並ぶ指標として、社会人への移行期において個人の組織社会化と社会的自立とのはざま課題となる「人間の個性」に着目して調査を行った。個性や独立に関する研究は西洋では盛んであるが、日本では加藤・高木(1980)、小野寺(1993)、池田(2000)以外はさほどなされていない。落合(1983)は個性を孤独感の視点から分析し、孤独感の成熟によって個別化・独立の感覚を測定する尺度を開発した。本研究では「孤独感類型別判定尺度」(落合, 1983)を使用した。

質問紙調査実施方法、縦断研究方法は研究1と同様である。

(3) 研究3

研究1・研究2から導き出された結果により、省察的自己覚知(自己の学習過程や思考過程における個人の制御について、観察し理解する機能)(Ridley, 1991)を刺激するとキャリア発達が促されるのではないかと仮説を立て、実験的検証を行った。2017年に中堅大学の2年生24名に対して、これまでのキャリア選択時における自己の意思決定を俯瞰させるワークショップを実施した。ワークショップでは、複線径路等至性アプローチ(安田・滑

田・福田・サトウ, 2015)、対話的自己理論 (Hermans & Hermans-konopka, 2010; Hermans & Kempen, 1999) を援用し、「対話的自己 I ポジションシート」(番田・杉森, 2017)を使用して、学生たちに自己分析を行わせた。ワークショップの事前事後に「キャリアアクション・ビジョンテスト」(下村・八幡・梅崎・田村, 2009)「大学生のためのキャリアレジリエンス尺度」(児玉, 2017)「キャリア探索尺度」(安達, 2010)を用いた質問紙調査を実施した。

2年後2019年、調査対象者が就職活動を終えた4年次後期に、彼らの進路の結果により「さらなる学修群(休学して語学留学に進む)」「就職成功群」「就職妥協群」「進路未決定未行動群」の4群に分け、質問紙調査結果の差異を分析した。

(4) 研究4

新卒市場における中堅大学の学生の特徴を明確化するために、比較文化的研究を行い、中堅大学生、選択性の高い大学の学生、インドネシアの大学生を対象に、共分散構造分析(SEM)を用いてキャリア発達モデルの比較をした。

インドネシアの大学への調査にあたっては、研究1・研究2の質問紙を、研究代表者とブロの日英通訳者として、バックトランスレーションメソッドを用いて日本語から英語に変換した。その後、2016年にインドネシアの PGRI アディプアナ大学の英語教員に協力を頂き、同じくバックトランスレーションメソッドを用いて、英語からインドネシア語に変換した。インドネシア語に訳された質問紙は、国立インドネシア教育大学と私立の PGRI アディプアナ大学の協力のもと、2017年に授業内で調査が実施され、両大学の合計474名の学生から回答を得た。

選抜制の高い大学への調査に関しては、関西の旧帝国大学の学生225名を対象に、2019年に、研究1・研究2の質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 研究1

アイデンティティ形成の視点からキャリア発達過程を検証したが、「就職活動 活性・満足群」と「就職活動 不活性・不満足群」に大きな差異がみられた。

「活性・満足群」は、大学入学以前に主体的な活動をし、進路決定をしている。しかしながら、大学入学時にアイデンティティの再構築が起き、自己の刷新がなされていた。大学入学後の活動に主体性があるものの、大学2年次では自己のアイデンティティ形成を「不活性」ととらえている傾向があり、学年が進むごとに「危機の経験を伴った不活性」「活性」へと上昇変化し、就職活動が成功裏に終了した際に「達成」に達する傾向にあった。以上の結果から、「就職活動 活性・満足群」では、省察的自己覚知(Ridley, 1991)が優れていることが示唆された。

一方で、「不活性・不満足群」には、小学生時から集団行動に不適應であった記憶のナラティブが見られるものの、大学2年次の時点で自己のアイデンティティ形成を「達成」ととらえている傾向にあった。ところが、「達成」ととらえている時期のナラティブには、実際の活動への関与の報告はなく、自己の認知と現実とに矛盾が生じていることが確認された。縦断研究の結果、学年の上昇に伴い、「達成」から「不活性」への下降変化がみられ、4年次の就職活動終了時に向かって、キャリア形成行動ができていないことへの自覚が見られた。「不活性・不満足群」には、省察的自己覚知能力になんらかの問題が生じていることが示唆された。

(2) 研究2

尺度の探索的因子分析により、中堅大学の学生の孤独感の構成は「生まれながらの孤独性」と「相互共感性」の2因子構造であることが確認できた。この2因子構造をクラスター分析にて群分けしたところ、4群:「独立群」(生まれながらの孤独性が高く、相互共感性も高い)24%、「孤独性のない協調群」29%、「孤独性のない強い共感群」42%、「孤立群」(生まれながらの孤独性が高く、相互共感性は低い)5% であることが見い出された。つまり、中堅大学の学生は、人間は生まれながらに孤独であるという、個である感覚を持っておらず、人間は互い理解共感が可能であるという感覚がある者が、全体の71%を占めることが明らかになった。

青年期の成長を、上質な孤独感の醸成であるにとらえていた落合(1983, 1989, 1999)の研究とは、齟齬の生じる結果になった。欧米でアイデンティティの到達として重要視される「個の意識」つまり「独立」ではなく、日本の中堅大学の学生は「独立意識よりも、自己と他者の相互理解」の感覚を持っている傾向があることが示された。

(3) 研究3

中堅大学の調査協力学生の就職活動結果により4群に分け、キャリア発達に関する回答の分散分析を行ったところ、「進路未決定未行動」群は、省察的自己覚知へ刺激を与えてもキ

キャリア発達が促進されなかった。「就職妥協」群は自己の問題解決能力に関して楽観視が生じることが明らかになった。一方で、「就職成功」群は、省察的自己覚知に刺激を与えられることにより、自己の問題解決能力に関する捉えなおしを行い、反省が生じていることが見出された。「さらなる学修群」は意思決定においてどの群よりも平均値が高く、意思決定への高い自覚のみならず、その後の行動を起こしていることが明らかになった。

つまり、「進路未決定未行動」群では、省察的自己覚知能力への何らかの問題が確認され、「就職妥協」をする学生は、現実問題に対して、楽観的に受け入れる方略をとることが明らかになった。「就職を成功」させる学生は、省察的自己覚知能力が優れていることが明らかになり、研究1の結果が支持された。

(4) 研究4

キャリア発達モデルを構築するにあたって、個別性(孤独感類型尺度)の因子分析による下位尺度が、アイデンティティ発達(同一性地位判定尺度)の達成要因である「関与」に影響を及ぼすという仮説を立て、モデルを構成した。

最も顕著な特徴として、中堅大学の学生は「相互共感性」が「探索と関与」に影響を及ぼしていた。一方で、選抜性の高い大学の学生は「個である感覚」や「孤立観」が「関与」に影響していた。インドネシアの大学生は、個人内の発達課題よりも社会的要因の方が「関与」に影響を及ぼしていることが見出された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 BANDA, K., SATO, T., YASUDA, Y., TOYODA, Y., & SUGUMORI, S.	4. 巻 -
2. 論文標題 Career Development during the School to Work Transition among the students of Middle-Ranked Universities in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Asian Vocational Education and Training (JAVET)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 番田 清美	4. 巻 -
2. 論文標題 日本の中堅大学に通う大学生のキャリア発達プロセス：アイデンティティ形成の視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学大学院連合教育学研究科 博士課程 学位論文	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 BANDA, K.	4. 巻 -
2. 論文標題 Career development of Japanese university students in middle classed universities: Qualitative research on transformation from sophomore to junior	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Congreso Internacional de Orientacion Educativa, Pronencias en ingles	6. 最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 BANDA, K	4. 巻 -
2. 論文標題 Introduction of TEM(Trajectory Equifinality Modeling):A methodology for analyzing career development	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceeding Seminar and Workshop Educational Psychology: Career Development in Psychology and Educational Perspective, Universitas Pendidikan Indonesia	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 BANDA, K.	4. 巻 -
2. 論文標題 Career development of Japanese university students	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The International Conference on Educational Technology of Adi Buana (ICETA8)	6. 最初と最後の頁 10-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 番田 清美
2. 発表標題 関東の私立中堅大学における大学生のキャリア発達プロセス
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kiyomi BANDA, Shinkichi SUGIMORI, Tatsuya SATO, Yuko YASUDA, Yuhiko TOYODA, & Ramlee MUSTAPHA
2. 発表標題 Career choice trajectory of the Japanese emerging adults who go to middle classed universities
3. 学会等名 10th International Conference on the Dialogical Self (Braga, Portugal) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kiyomi BANDA
2. 発表標題 Career development of Japanese University students in middle classed universities Qualitative research on transformation from sophomore to junior
3. 学会等名 Congreso Internacional de Orientacion Educativa 2017, IAEVG, UNAM University (Mexico City, Mexico) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kiyomi BANDA
2. 発表標題 Future education: Welcoming the Era of Exponential
3. 学会等名 The 9th International Conference of Educational Technology of Adi Buana (Surabaya, Indonesia) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kiyomi BANDA
2. 発表標題 School-to-work transition in the Japanese context and the TEM methodology for analyzing career development
3. 学会等名 International Seminar and Workshop on "Career Development in Psychology and Educational Perspective", Universitas Pendidikan Indonesia (Bandung, Indonesia) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kiyomi BANDA
2. 発表標題 Career development of Japanese University Students
3. 学会等名 The 8th International Conference on Educational Technology of Adi Buana (Surabaya, Indonesia) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Kiyomi BANDA
2. 発表標題 Career Identity Work: visualizing dialogical selves at the bifurcation points of adolescents' career development, The experience of bifurcation point where DS and TEA meets
3. 学会等名 9th International Conference on the Dialogical Self (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 番田清美・上淵寿
2. 発表標題 Career & Identity Workによる大学生のキャリア発達分析 - TEA と DS理論を融合させて
3. 学会等名 日本質的心理学会第13回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 番田 清美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 290
3. 書名 文化心理学 理論・各論・方法論 Pp.139-153 文化から見るキャリア/キャリアから見る文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 達哉 (SATO Tatsuya) (90215806)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	
研究分担者	安田 裕子 (YASUDA Yuko) (20437180)	立命館大学・総合心理学部・准教授 (34315)	
研究分担者	上淵 寿 (UEBUCHI Hisashi) (20292998)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	削除：2017年1月6日

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	杉森 伸吉 (SUGIMORI Shinkichi) (60266541)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	追加：2017年1月6日
研究 協力者	豊田 雄彦 (TOYODA Yuhiko) (80331411)	産業能率大学・経営学部・教授 (32715)	